

平成二十三年十一月二十二日(火)

第四二〇回 史跡めぐり(半日コース)

「円空」のころを刻む秘仏を堪能

そして分母を観て知る

NPO 法人 越谷市郷土研究会

第四二〇回 史跡めぐり(半日コース)

「円空」こころを刻む秘仏を堪能

そして盆栽を観て知る

● 日時 平成二十三年十一月二十二日(火)雨天決行

● 集合 午前八時三〇分 東武線越谷駅西口

● 参加費 一、五〇〇円(交通費・入館料・保険料・

資料代など)

● 案内者 篠原陸郎・山崎弘治・古谷京子・浜富雄

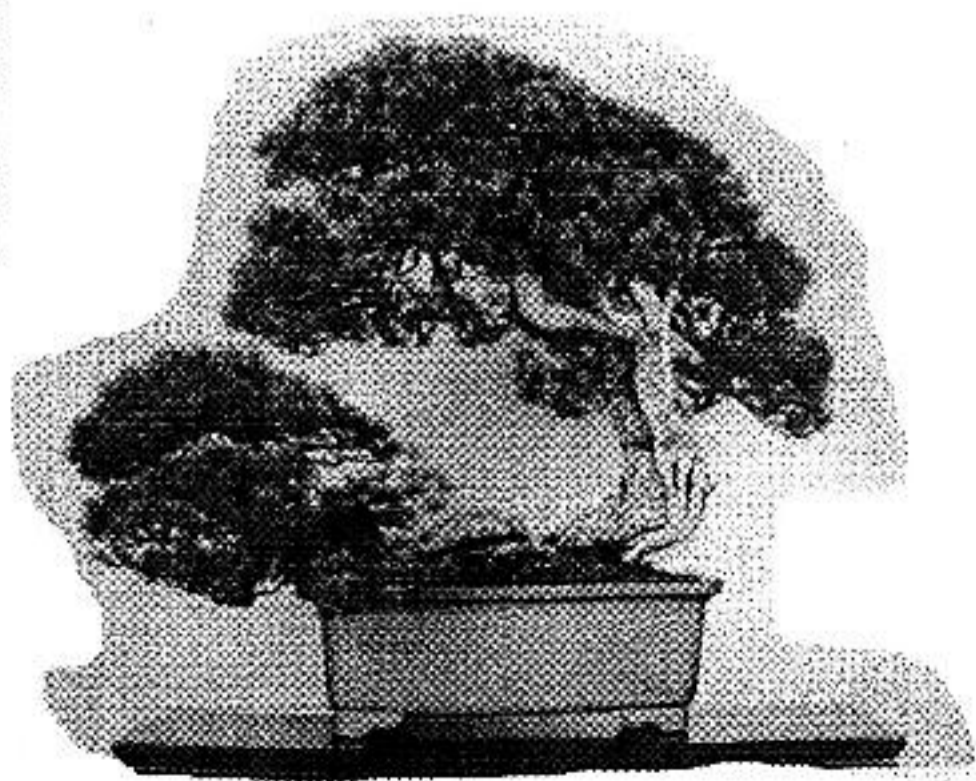
● 日程

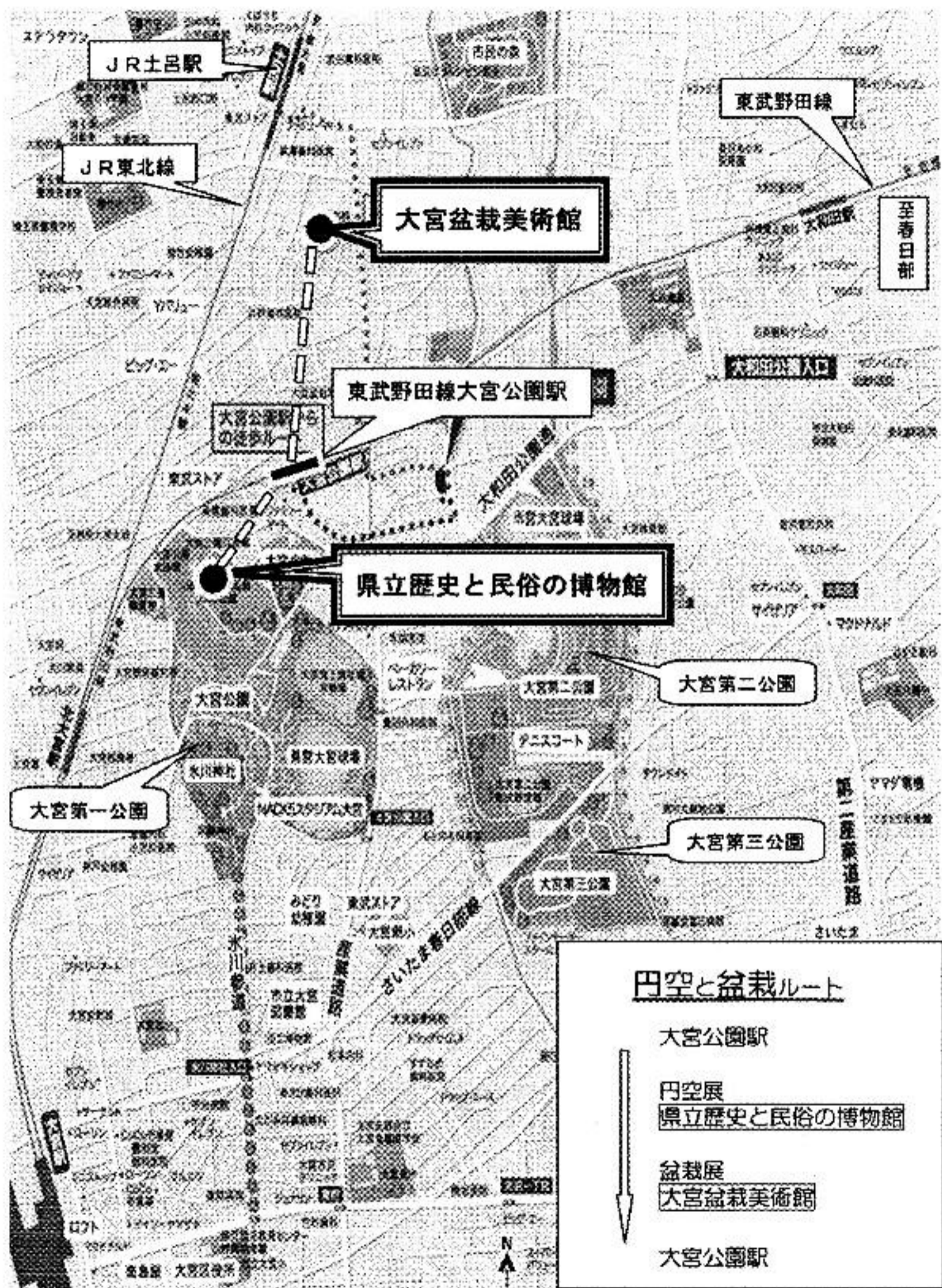
越谷駅⇨春日部駅⇨大宮公園駅

○ 埼玉県立歴史と民俗の博物館

○ さいたま市大宮盆栽美術館

大宮公園駅(自由解散)⇨春日部駅⇨越谷駅
解散十二時三十分頃





●「円空」こころを刻む

(埼玉県歴史と民俗の博物館刊「円空こころを刻む」より)

○特別展にあたって

江戸時代前期、美濃に生まれ、荒波を乗り越えて蝦夷地と呼ばれた北海道へ渡り、自ら彫った仏像を岩屋に納めた僧がいた。円空という名のその僧は、各地を巡り歩き、訪れた先々で、木切れを利用して、数々の仏像や神像を彫った。

円空といえど岐阜や愛知が思い浮かぶ。意外に思われるかもしれないが、円空はここ埼玉の地も訪れて、数々の仏像を残して行った。迷いのない直線的な彫りと簡潔なつくり。真似できそうではないながら誰も真似できないのが、円空独特の作風である。それは正統な仏師がつくる仏像とは違う、親しみやすさにあふれている。

埼玉に残る円空の作品は、個人宅にあるものが多いこともあり、そのほとんどが公開されていない。昭和六十三年に開催した「さいたまの円空」から二十三年がたつが、新たに確認された像は少くない。

円空が生きた時代から約三五〇年。円空が彫った十二万體という像のうち、残っているのはおよそ五千體ぐらいで、天災や人災をかくぐつて残っているのはわずかである。

○円空の概略 (ブリタニカ国際大百科事典「より」)

〔生〕寛永九年(一六三二) 美濃、竹ヶ鼻

〔没〕元禄八年(一六九五) 美濃

江戸時代初期の天台宗の僧侶。美濃の農家に出生。二三才で出家。尾張高田寺で金剛、胎藏両部の密法を受け、のち東日本各地を遍路、生涯を布教、造像活動に捧げた。後西天皇より上人号と金襴の袈裟を下賜され

る。今行基とも呼ばれ、十二万體の造像を発願し、岐阜・愛知・北海道・埼玉・長野・滋賀などに数千の作品が現存する。生木を鈍なたでたち割り、背面は手を加えず、前部半面に仏像や神像などを鈍・のみ・小刀などによって荒彫りしたもので、円空仏と称する。また流暢な筆致による独自の仏面の遺品もある。元禄二(一六八九)年、長良川河畔に弥勒寺を再興、同所で入寂。

○なぜ日光山に

円空は度々日光山へ出かけ、また百二十日も山籠りして造像を行っている。

日光は古来山岳信仰の聖地であるとともに江戸幕府を開いた徳川家康を祀った重要な地である。円空が入山した時期、歴代の將軍の社参が行われず、また日光では、大火・飢饉・洪水・大地震など災害が頻繁に起っており、日光神領から困窮について幕府へ訴えがなされていた。津軽弘前では不審者扱いされ、城下を追われた円空のような者が入れる隙があつたのは、そのような時期であつたためかもしれない。

○なぜ埼玉に

埼玉には円空の作品が多数残されており、岐阜や愛知に次いで確認数が多い。しかし、年号が入つた像はない上、円空やその作品を記した記録、伝聞記事も確認されていない。

埼玉の円空仏は県東部に集中している。これは右に記すように、日光及び日光街道との関連があるのではと思われる。

また県東部は天領(幕府直轄地)であるため、取締りも厳しくなく、弘前のように追われるような事もなく、又農村地であるため、農民からは喜んで受け入れられたと思われる。

○円空作品の特徴

まず、「同じものはない」ということである。埼玉で比較的例の多い不動明王や役行者像、東部のある地域に集中する小像群などで比してみると、同じ種類でありながら、それぞれが微妙に形が異なっていることに気がつく。

不動明王では、頭上の宝髻や頂蓮、宝剣の形、絹索が垂下する形など、それぞれが少しずつ違っている。役行者像では、頭巾や錫杖の形、高下駄の位置などが異なっている。小群像ではほとんど同じ形でありながら、背面に三条の衣文線を入れたり、横線を刻んだり、何故、こうも変える必要があるのかと思うくらいである。人の姿かたちが異なるように、仏像の姿を変えることに意義を見出していたのかもしれない。

また、円空独特の表現があるということである。それは、三角形の存在感のある鼻であり、開いた口である。特に口の表現は注目される。憤怒相のものとはもとより、如来像や菩薩像でも明らかに口を開いたものが多い。そして、比較的大きな像の口元には歯とみられるものが彫りだされている。越谷の不動明王坐像の口元をみると、はつきりと上下の歯が表現されている。ふつうの仏像彫刻では、歯がみえるほどに開くものは、ごく特殊なものを除いてはみられないものである。

手のひらには、手相でみるシワが横だけでなく、縦にもある。極めつけは、体に雲文（右上から反時計回りの渦）を彫りだしている。円空以外の仏像ではみられない。

● 材料の木材について

円空が使用した材の中には建築用のものがある。鉦葉師像は、名古屋城の築城余材を使ったとされる。また越谷の不動明王坐像の

顎に古釘がうたれたあとがある。これら古材を使ったのは、古材・廃材が良質な木材であったからであろうか。

● 円空の作品が寺の本尊であることは極めてまれで、県内では善光寺の薬師如来立像のみである。このことから、円空仏は、本格的な造立・安置する前の一時的なものとして制作された可能性がある。

円空と常に比較される同じ造像の遊行僧「木喰」がいる。

木喰（もくじき）

〔生〕享保三年（一七一八） 甲斐

〔没〕文化7年（一八一〇）

二十二歳で出家し、五十六歳のとき諸国巡礼の旅に出て、六十歳を過ぎてから造像を始める。北海道から九州までに千体を超えるといわれる。従来の仏教彫刻の様式にとらわれない独創的な作風で、それらのなかには口元にかすかな笑みを浮かべたものが多い。



● 越谷の円空仏

(歴史と民俗の博物館刊「円空」より)

現在越谷市には円空仏が4件8体存在する。

1. 個人 不動明王坐像
2. 西福院 不動明王
制任迦童子
鈴羯羅童子
3. 安国寺 楊柳観音菩薩像
善財童子立像
護法童子立像
4. 義福院 釈迦如来坐像

① 不動明王坐像 (個人)

総高105.0 像高76.0

臂高52.0 裾奥23.0

頭上に頂蓮をのせ、頭髪は大きめの松かさ状で、大きく目を見開いて口を開く。牙のほか、上下の歯をあらわしている。右手に鐔のある宝剣を執り、左手は綱索をつかんで岩座の上に坐す。綱索は真下に垂下する。建物の古材を使ったとみられる檜材の木裏に彫刻。埼玉県内最大の坐像で、迫力がある。もと修験の家に伝来。



牙のほか上下の歯をあらわしている。「歯」まで彫る仏像はめずらしいという。又、左頬に古釘がうたれたあとがある。(建築余材を使ったか)



不動明王及び二童子像 (西福院 市指定文化財)

不動明王 総高47、7 臂張21、0
腹奥11、8

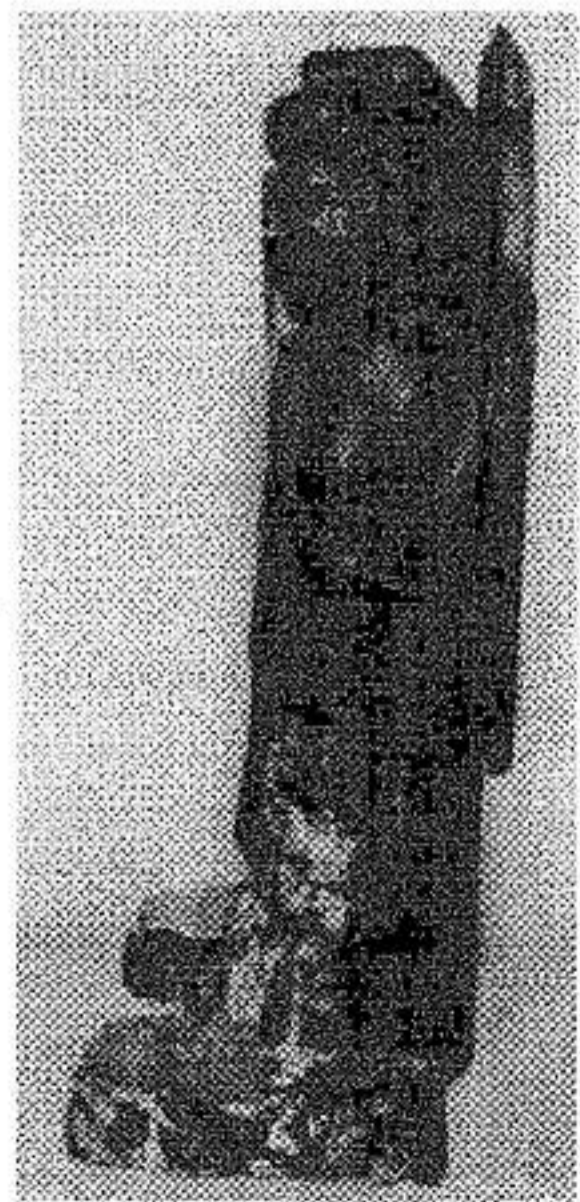
(左) 制任迦童子 総高23、2 像高20、8
臂張8、6 腹奥5、1

(右) 衿羯羅童子 総高24、2 像高19、6
臂張9、8 腹奥6、0

不動明王は頭上に頂蓮をのせ、歯牙は上下、右手に鐔のない宝剣、左手は胸の前で綱索をつかんで岩座の上に坐す。綱索は布带状に垂下し岩座にかかる。檜の丸材を二つ割りにした割り放ち面に彫刻。背に後世の光背が打ち付けられている。衿羯羅童子は円頂、胸の前、袖の中で手を合わせる。制任迦童子は髪を逆たて、正面で両手で金剛棒を地に突く。両童子とも不動明王の余材を利用したとみられる。光背及び台座は後世のものである。

*衿羯羅童子 (本来は梵語) 八大童子の第七。不動明王の脇侍として右側に侍す。天衣・袈裟を付け合掌して独鈷を横にはさみ持つ。

*制任迦童子 (本来は梵語) 八大童子の第八。不動明王の脇侍として左側に侍す。からだは紅色で頭に五髻があり、左に三結を握り、右に金剛を持ち、袈裟をつけていない。



楊柳観音菩薩坐像 (安国寺 市指定文化財)

総高 70.5 臂張 25.2
膝奥 14.5

頭上正面に化仏を頂き、白毫を陰刻する。膝上、袖中で印を結び、台座上に坐す。衣の裾は台座前に垂下する。右裾前に楊柳を差した水瓶を置く。左には雲文と龍の頭を配す。最下部には波頭があらわされ、魚、水鳥、犬のような動物などを彫りだす。建築古材とみられる檜材を利用し、背面を平らに仕上げる。顔をはじめ、ノミ目を丁寧に整えている。

*化仏 衆生を救うために、さまざまな姿となって現れた仏。化身。

*白毫 仏の眉間にあるという白い巻き毛。眉間白毫相として仏の三十二相の一つに数えられる。

*印 指を種々の形に折り曲げて、仏や菩薩の悟りや力を象徴的に表すもの。

*楊柳観音 柳の枝を手に持って、人々の病気をなおすことを本誓とするといひ、薬王観音とも呼ばれる。



犬のような動物



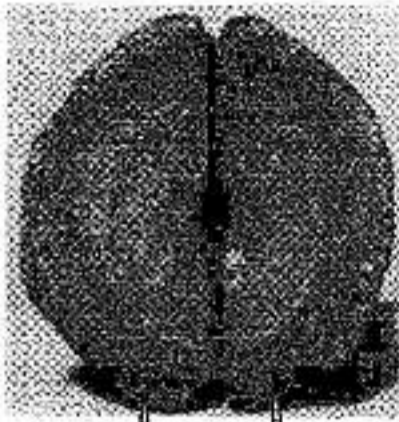
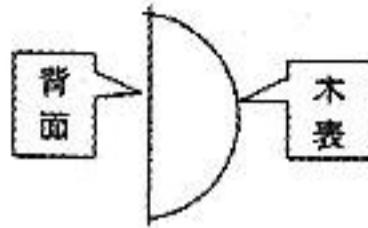
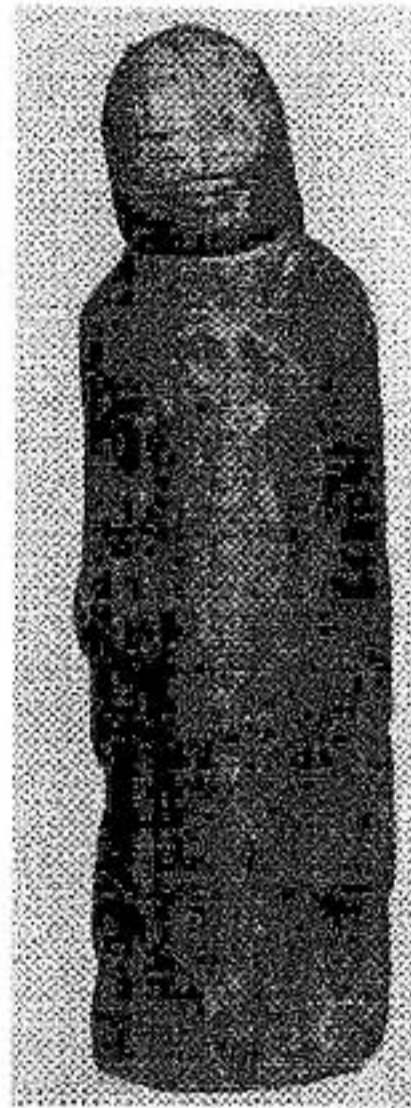
魚・水鳥のような彫り物

3-2

善財童子立像 (安国寺 市指定文化財)

像高 52.2 臂張 16.3
腹奥 7.6

頭部は円頂^{えんてい}。胸前、袖中で両手を合わせ、体をやや右に傾けながら立つ。桐の丸材を二つ割りにした木表側に彫刻し、背面は割り放ったまま、木芯だけを取り除いている。頭部はあまり^{しやう}錮^こたっていない。襟元を簡単に刻んだだけで、衣文線は省略されている。護法童子(3-3)と一材である。



護法童子立像
善財童子立像

3-3

護法童子立像 (安国寺 市指定文化財)

像高 51.1 臂張 15.5
腹奥 8.5

頭上に籠の頭を置き、胸前、両手で宝珠^{ほうじゆ}を抱く。両手先は袖中^{そで}である。頭をやや左に傾けながら立つ。桐の丸材を二つ割りにした木表側に彫刻し、背面は割り放った後、丸ノミで縦に数条の線を刻む。木芯も一部残る。襟元を簡単に刻んだだけで、衣文線^{えもんせん}は省略されている。善女龍王と呼ぶのが適切かもしれない。



背面

円空略年表

(歴史と民俗の博物館刊「円空」より)

和暦(西暦)	年齢	事項
寛永9年 (1632)	1歳	美濃国(現岐阜県)に生まれる。[貫前神社旧蔵「大般若経」奥書] *羽島市、郡上市美並町など諸説ある。
承応3年 (1654)	23歳	某寺を出奔。[「近世畸人伝」]
寛文3年 (1663)	32歳	神明神社(郡上市美並町)で天照皇太神像など3体造像。[同社棟札]
寛文6年 (1666)	35歳	津軽藩弘前城下を追放される。[「弘前藩庁日記」] 松前に遷り、北海運内で造像活動。 *月蔵寺閻魔王像[背面墨書銘]
寛文9年 (1669)	38歳	鉦築師(名古屋市)で造像。[「張氏家譜」「府城志」]
寛文11年(1671)	40歳	法隆寺(奈良県)の巡礼者塘よめ法相中宗血脈を受ける。
延宝2年 (1674)	43歳	三蔵寺(三重県志摩市)の「大般若経」などを修復。
延宝3年 (1675)	44歳	大峰山(奈良県吉野郡)で修行、役行者像を造像。[背面銘]
延宝7年 (1679)	48歳	園城寺(滋賀県大津市)の尊栄から、「仏性常住金剛宝戒相承血脈」を受ける。 中観音堂観法神像造像[背面銘]
延宝8年 (1680)	49歳	月崇寺(茨城県笠間市)観音菩薩像造像[背面銘]
延宝9年 (1681)	50歳	貫前神社(群馬県富岡市)で大般若経を読み終わる。[同経奥書]
天和2年 (1682)	51歳	日光円観坊で千手観音菩薩像造像[背面銘] 貫前神社で写経。
貞享元年 (1684)	53歳	高賀神社(岐阜県関市)で漢詩を狭む。[「神歌集」] 荒子観音寺(名古屋市)の円盛から「天台円頓菩薩戒師資相承血脈」を受ける。 [円空愛用経本]
元禄2年 (1689)	58歳	園城寺の尊栄から「授決集最秘師資相承血脈」を受ける。 *日光明覚院旧蔵観音菩薩立像 [背面墨書銘]
元禄3年 (1690)	59歳	10万體造仏。[観音堂(岐阜県高山市)今上皇帝像背面墨書銘]
元禄5年 (1692)	61歳	高賀神社で雨乞祈願。[同社懸仏銘]
元禄8年 (1695)	64歳	弟子円長に「授決集最秘師資相承血脈」を伝える。 7月15日入定 [入定塚(岐阜県関市)碑銘]

4

釈迦如来坐像

弘福院

市指定文化財

総高 40.0 像高 27.2
膝張 17.4 台座奥 9.8

肉髻をあらわし、通肩に衣をまとい、膝の上で、右手を下にして左右の手を重ねて印を結び、蓮台は岩座に載る。肉髻には毛筋を粗く刻む。



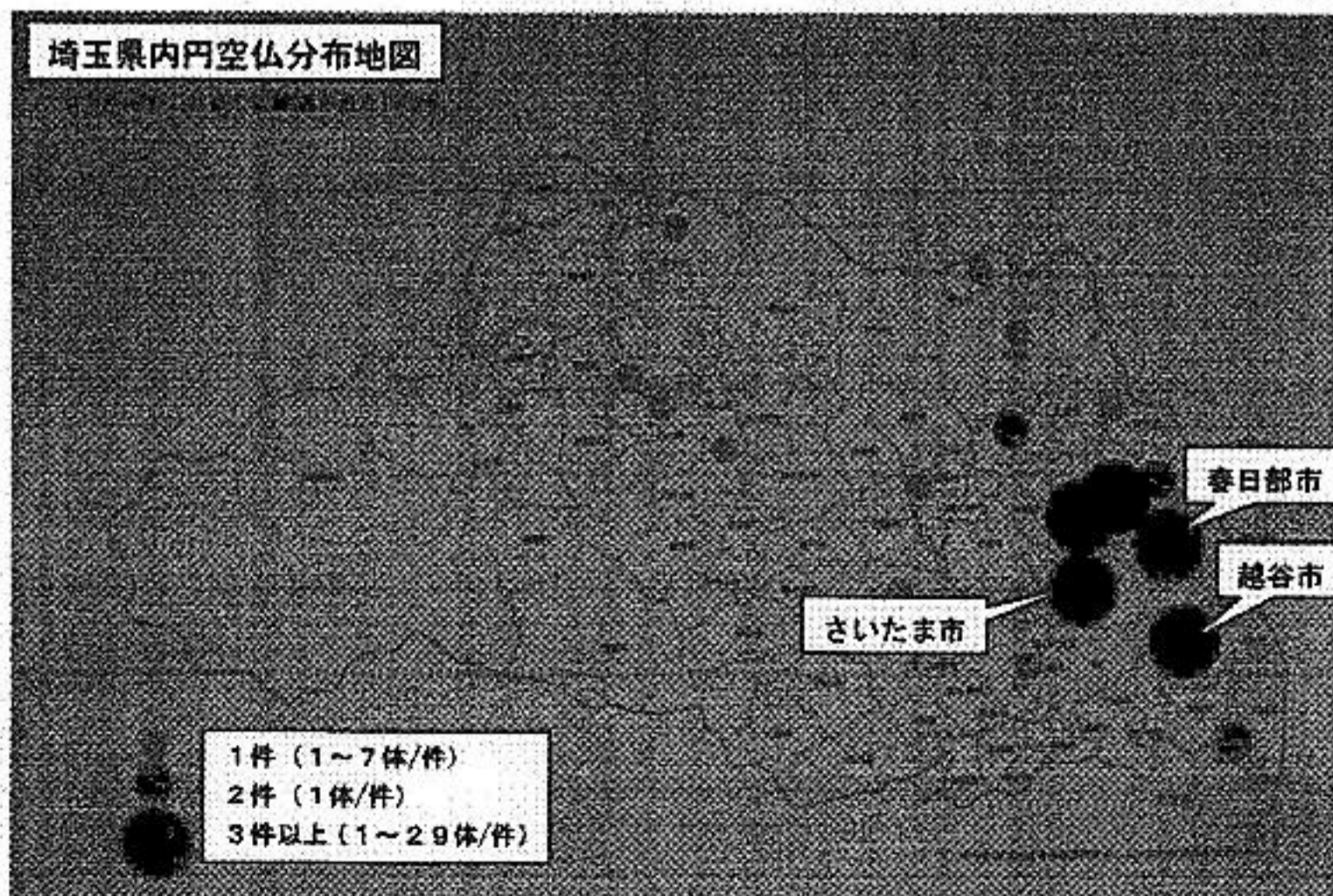
*肉髻 仏の三十二相の一。頭頂部にある髻に似た一段高い盛り上がりがある。 (仏頂)

*通肩 僧侶が袈裟を両肩を覆って着ること。 (偏袒右肩)

*印 指を種々の形に折り曲げて、仏や菩薩の悟りや力を象徴的に表すもの。

(歴史と民俗の博物館刊「円空」より)

埼玉県内円空仏分布地図



● 世界初の公立「盆栽美術館」

(大宮盆栽美術館冊子より)

○開館にあたって

盆栽というと、一般には、裕福な人々や功成り名を遂げた御隠居さんの結構なご趣味、というイメージが色濃い。

事実、日本国内で開催される、権威ある盆栽展を覗くと、そこには、著名人や大コレクターたちが所有する名樹がずらりと並び、われわれ庶民は、ただただ圧倒されるばかりである。そしてうっかりと口も開けないような独特な雰囲気がある。

一方ではここ数年、大型名園芸店には「ミニ盆栽」や「苔盆栽」のコーナーが設けられ、盆栽が新たなブームを呼んでいる。

そこで、開館にあたり「盆栽」を次のように位置づけている。

・まず、前提として盆栽が園芸の一分野であるが、単なる鉢植の植物ではない。一鉢の盆栽がかたちづくられるためには、植物が生長し続けた気が遠くなるような時間と、手業の粋や深い創造力が込められている。そして生きた植物という素材ゆえ、「生きた芸術」とも呼ばれる。

・盆栽とは、西洋にない、主として中国の文化・思想を学びつつ和洋化した「日本」の「伝統的」な技芸観・芸術観を受けて成立し、西洋的な絵画・彫刻・工芸とは異なる価値体系に位置づけられる造形、すなわち美術である。

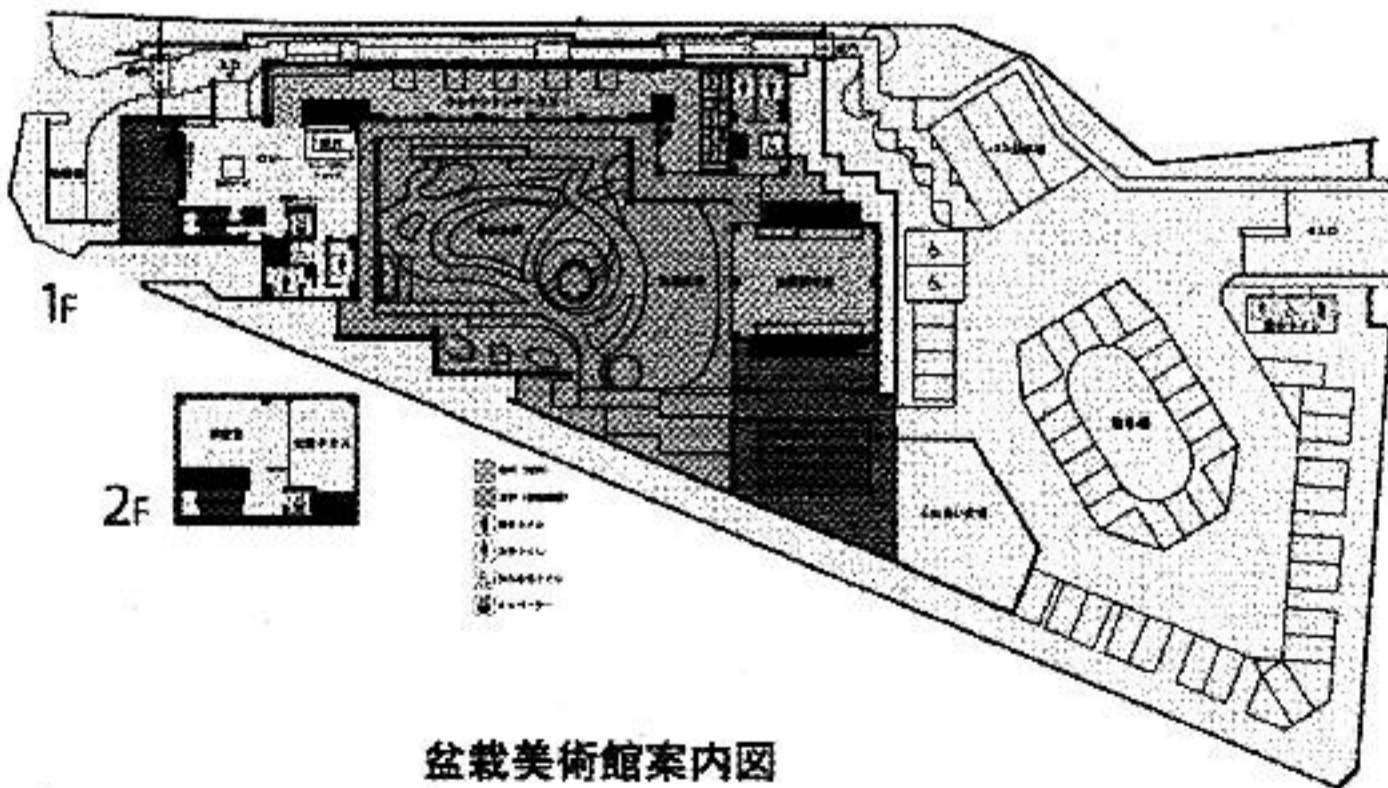
○当館内容

総合的な盆栽文化を発信する世界で初めての公立の「盆栽美術館」として二〇一〇年に開館した。盆栽を中心として、^{すいぎょう}盆器・水石・絵画資料・歴史資料などを紹介し、盆栽のすべてを研究し公開している。

展示室内には、およそ9点の盆栽を展示している。なかでも、部屋の格式を真・行・草の3つに分けた「座敷飾り」コーナーでは、それぞれ

の格式にあわせた盆栽の飾り方を観賞できる。

庭園には40〜50点ほどの、季節に合わせた見ごころの盆栽を展示し、盆栽広場では、テーマ展示や各種のイベントを行っている。



盆栽美術館案内図

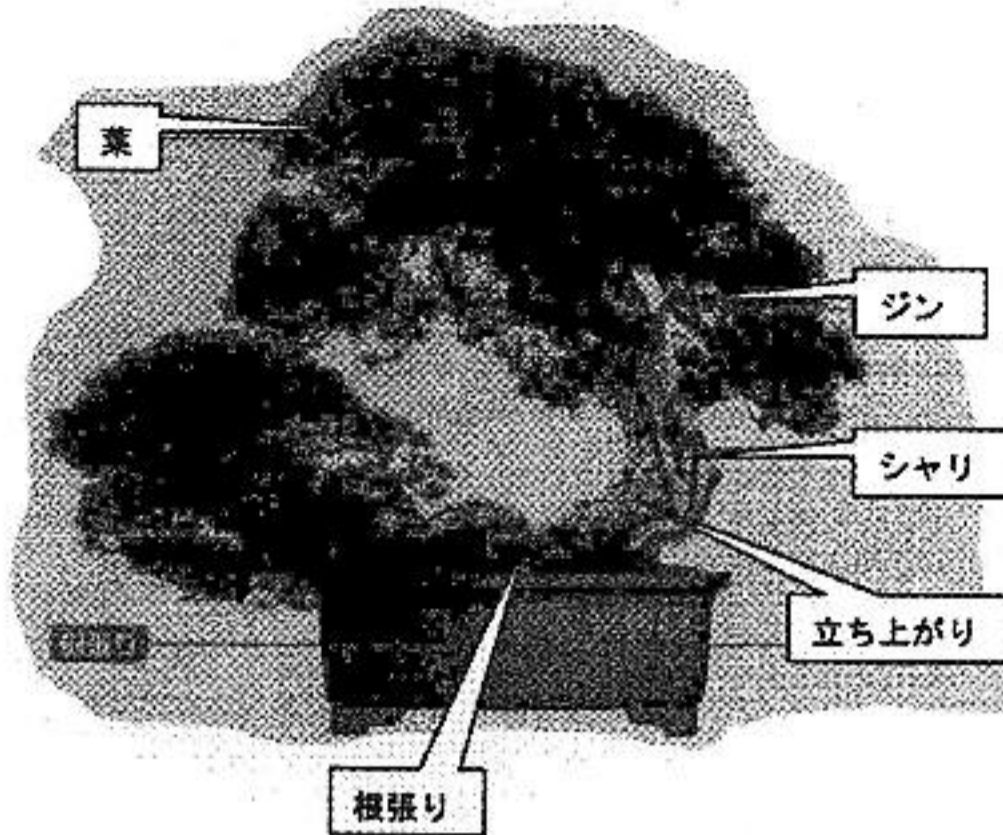
● コレクションの数々

(大宮盆栽美術館冊子より)

○ 盆栽

当館の盆栽コレクションは、旧・高木盆栽美術館が収集した作品群を母体としている。その多くは、著名人が所有した盆栽や、樹齢百年を越す盆栽、雅やかな銘を与えられた盆栽などで、世代を超えて今日まで、大切に育成管理されている。

盆栽部分の呼び方

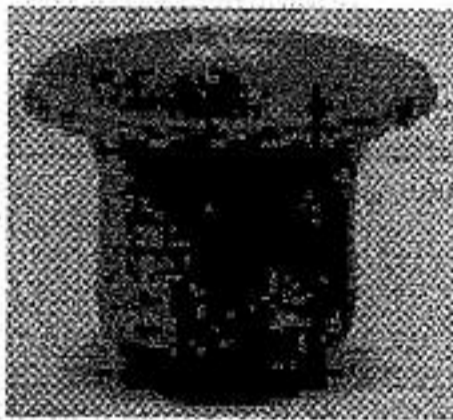


ジン (神) : 枝先の枯れた白い肌
 シャリ (舍利) : 幹の枯れた白い肌

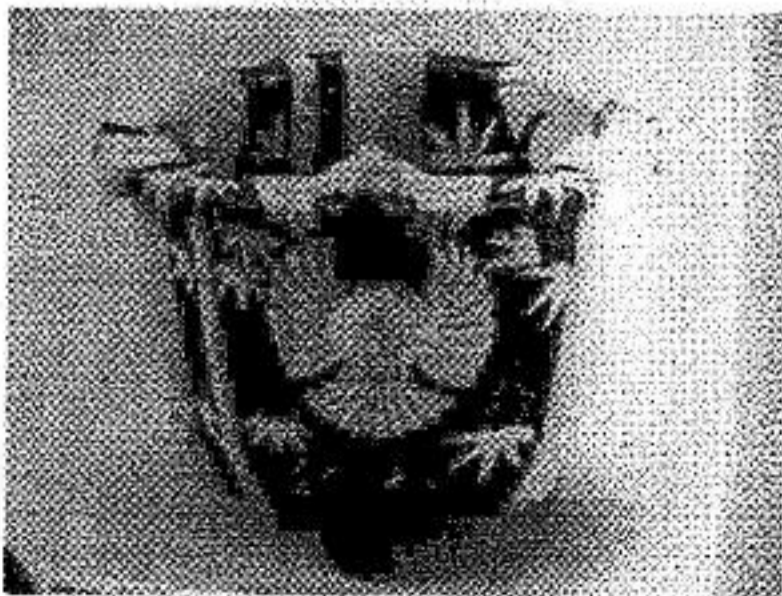
○ 盆器

盆栽を育て、観賞するためには、樹木を植える器が必要となる。こうした器は、中国では「花盆」、日本では「鉢」と呼ばれている。昭和前期より、盆栽の愛好者たちが、水石(すいせき) (盆などにのせて観賞する自然石)などを飾る水盤と合せて「盆器」と呼ぶようになった。それらの収集家が、いわゆる蘭鉢(らんぼち)や万年青(ねんせい) (ユリ科の多年草)鉢も一緒に収集してきたため、盆栽界では、盆栽に用いるものに限らずに多種多様な作品を「盆器」と総称している。

中国の盆器(花盆)の歴史は宋の時代(12世紀)に完成度(青磁)を見せているが、日本の歴史は鎌倉時代の絵巻に見られ、江戸時代の(19世紀)には、高度の技術を用いた陶磁器の鉢が製作されるようになった。



中国の盆器 (青磁花卉文花輪丸鉢)



瀬戸焼 (瑠璃釉竹に福良雀文丸鉢)

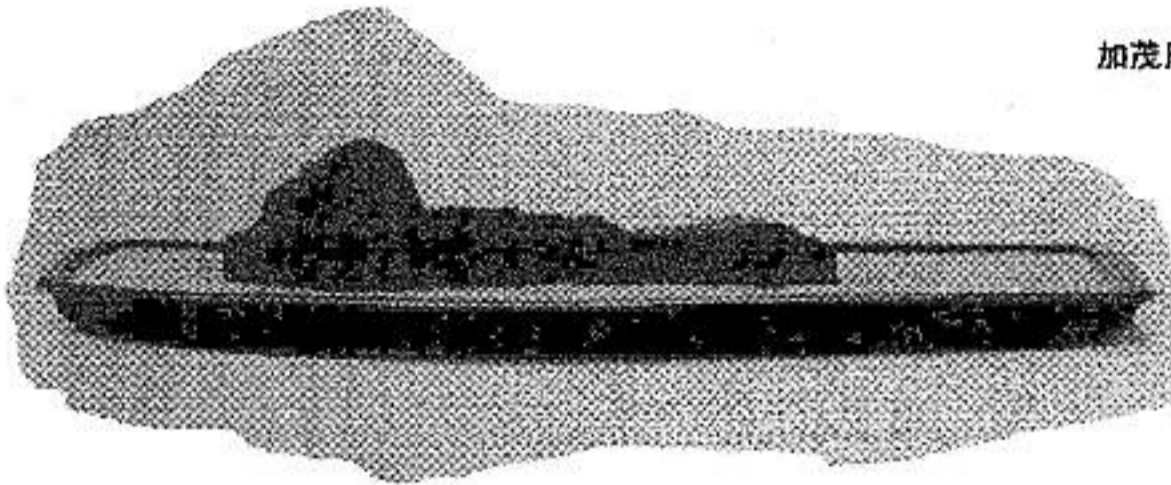
○水石

基本的には人間の手が一切加わらない、自然のままの状態の石を室内に飾り置き、それを愛でるといふ行為は、東アジア文化圏に顕著なものといえる。その対象となる観賞石を、中国では古くは「怪石」、その後は「奇石」（珍しい形の石）と称しているが今日の日本では一般的に「水石」と呼び慣らわしている。

日本の観賞石の歴史は、明との交易を受けて輸入文物を珍重する唐物趣味が隆盛し、禪宗文化も栄えた室町時代に、中国から奇石を尊ぶ「寶石」の風習が移入されたことから始つたとされる。

自然石の形状に山などの情景が縮小された姿を見て取り、それを愛でる美意識は、盆栽と深く響き合う性格のものであり。それゆえに座敷飾りや席飾りにおいて、盆栽と水石がしばしば取り合わされる。

加茂川石 銘 蜀山道



○浮世絵

当館の所蔵品に、多色刷りの木版画による浮世絵が含まれている。これらの絵画は美術品として楽しむだけでなく、それぞれの時代の風俗が描かれた文化を知るための手がかりとして注目される。たとえば、夜の植木売りの陳列台に所狭しと並べられた鉢植や、それを買い求めて手に持つ美人の姿があらわされたり、役者絵の道具立てとして鉢植が扱われる図なども多く描かれている。

これらは江戸時代や明治時代の盆栽文化を知るための手がかりとなり、文献資料と同様の、絵画資料としての側面が期待される。



夜店の植木棚の前で、豪華な装いをした遊女（瀬川）が鉢物を選んでいく様子を描いている。

● 座敷飾り (大宮益菽美術館冊子より)

○ 座敷飾りとは

座敷飾りとは、室内の床の間や床脇棚、付書院などに、書画やさまざまな工芸品を飾りつける、日本の伝統文化である。来客の身分や季節の趣向によって飾る品々を変えるところに、大きな特徴を持っている。

○ 座敷飾りの歴史

座敷飾りの歴史は室町時代に始まる。当時、中国との交易によって多くの書画や工芸品が輸入され、それらは唐物と呼ばれて貴ばれていた。やがて室町將軍家の下で雑務や芸能に従事した同朋衆らにより、唐物を室内に飾る様式が整えられた。

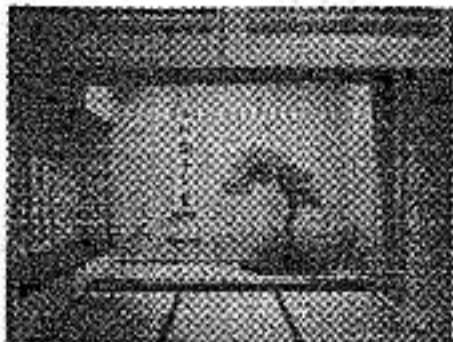
○ 座敷の格式

中国の代表的な書の様式、真書(楷書)・行書・草書を基に、日本の伝統的な型が生み出された。厳格な「真」、くずした「草」、中間の「行」の格式は、身分制度の厳格な江戸時代にあって座敷にも適用された。

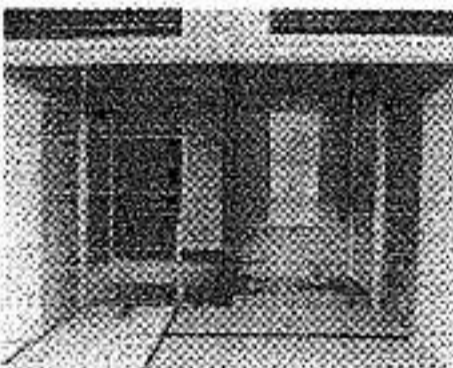
最も格式の高い「真の間」



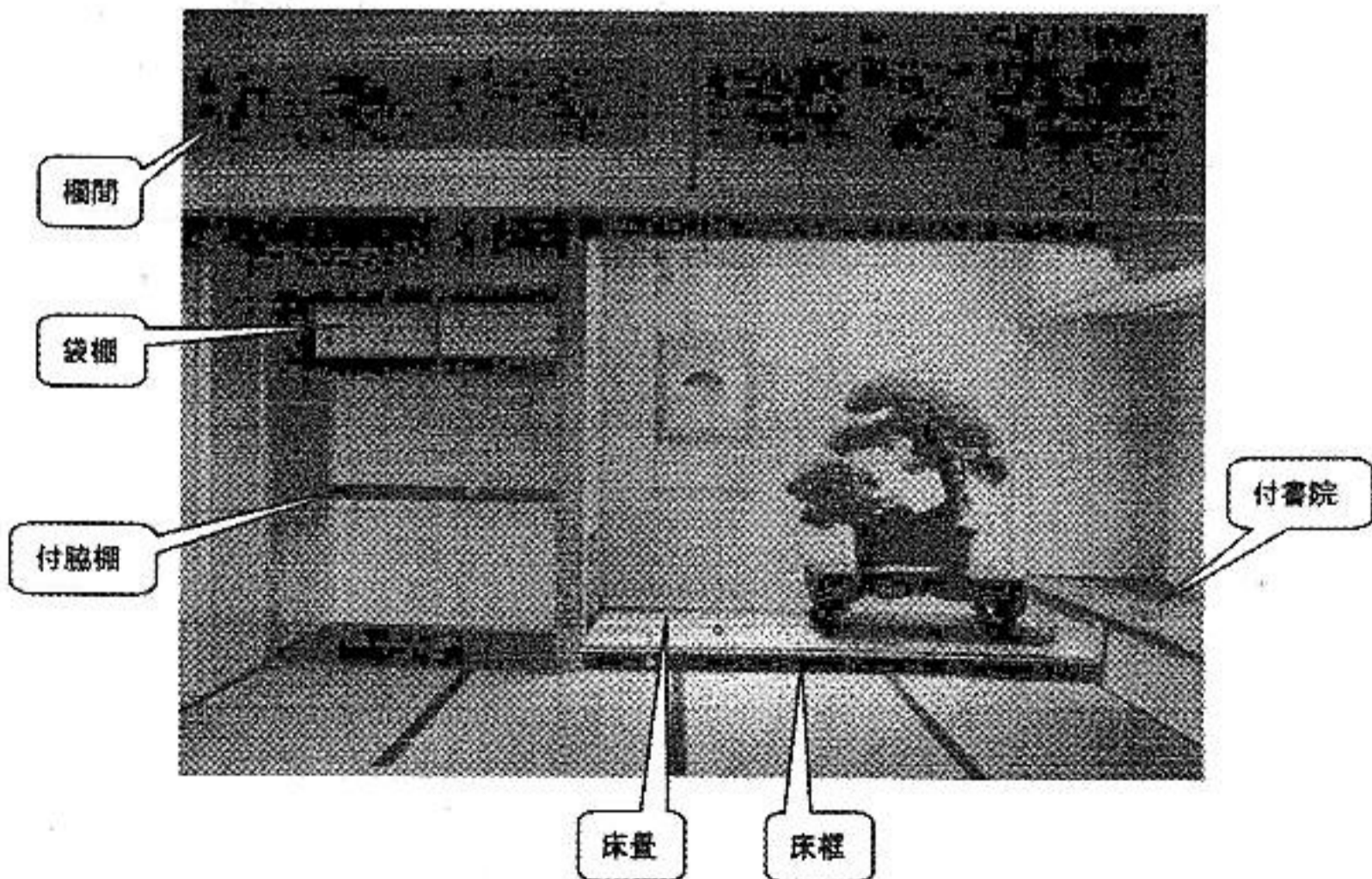
「行の間」



「草の間」

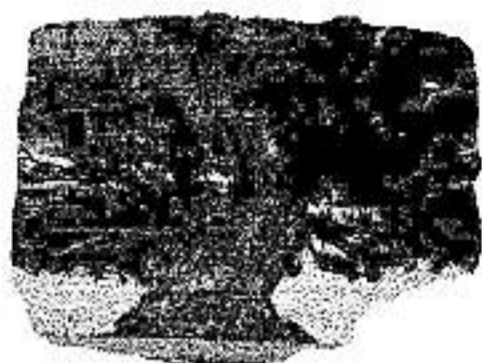


真の間



立ち上がり

根元から最初の枝までの幹は「立ち上がり」と呼ばれ、ここから上に向かって伸びひろがることで、大木のような迫力が生み出される。



根張り(ねばり)

目線を根元に合せれば、小さな盆栽も大木の姿に見える。歳月を重ねた根は隆起し、力強く土をつかむ。特に、あらゆる方向に根を伸ばす「八方根張り」は理想の一つである。



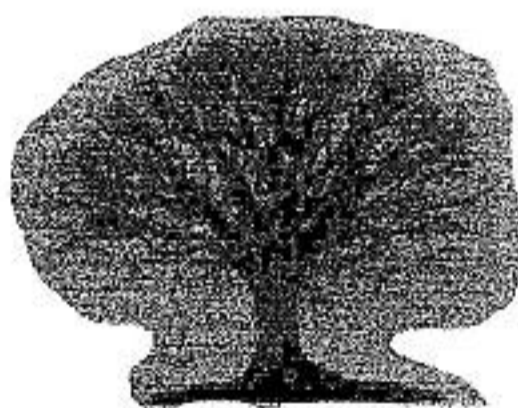
葉

大木を縮小したイメージを目指すため、葉の小さな木が種木(たねぎ)に選ばれることが多い。五葉松などでは、光沢のある葉が良いとされる。またモミジなどでは、青葉から紅葉へという葉の変化が楽しめる。



枝ぶり

幹から伸びる枝は、盆栽の輪郭を形づくるため、盆栽の美を評価する重要な要素となる。木に勢いや立体感与える「役枝」がバランスよく配置され、「忌み枝」の無いことが、良い盆栽の条件である。



ジン・シャリ

歳月を経た松や真柏(しんぱく)では、幹や枝の一部が枯れて、そのままの形を残すことがある。こうした幹は白い肌を見せ、緑色の葉が茶色い樹肌と美しいコントラストを生み出す。枝先のものは「ジン(神)」、幹の一部が枯れたものは「シャリ(舍利)」と呼ばれる。特に長い歳月を重ねた真柏では、複雑に歪曲したシャリの特異な造型が、見どころである。



ジン



シャリ

● 盆栽の技 (大宮盆栽美術館冊子より)

○水遣りみりや

盆器のなかの限られた土から水を吸い上げるため、常に十分な、且適度な水分が行きわたっていないければならない。

○剪定せんてい

樹木は、年ごとに新しい枝を伸ばす。そのために樹木を意図した形に仕立て、あるいは一度完成させた形を維持するために、不要な枝や伸びすぎた枝を切り落とすのが剪定である。

○針金かけ

針金で枝を意図した通りの形に整える。

○芽摘み・葉刈りかっぱみ・はが

新芽が柔らかいうちに芽先を摘み取り、枝が伸びすぎないように、また脇の小枝に養分が行きわたるようにする。また日光が枝先に当たるように枝先の葉を落す葉刈りを行う。

○植え替え

年数を重ねた木は、伸びすぎた根がからまり、成長の障害となる。また古くなって目のつまった土は、空気を通さなくなる。このため定期的に盆栽を盆器から出して根を切り土を替える。

● 盆栽の歴史 (大宮盆栽美術館冊子より)

わが国における盆栽の文献資料は、近世後期(江戸後期)にならな
いと登場しない。しかし、植物を身近な住空間に飾ることは、かな
り古くから行われてきたと思われる。

○中世絵巻物に描かれた盆栽

・「西行物語絵巻」に西行が出家を志す直前の場面、隣家の盆景が描か
れている。

・延慶2年(1309)成立「春日権現霊験記絵巻」にも、中庭に木製
の石台を置き、その上に化粧砂をめぐらし、石と樹木を配した盆景色
絵巻がある。

・数例だが、中世絵巻物の世界では、盆栽は、建物に非常に近い位置に
配するが、室内から眺めるのみで、決して中には入れないということ
が云えそうである。

○近世の鉢植と盆栽

・元禄11年(1698)刊の貝原益軒かいばらたきけんの園芸書「花譜」に初めて「盆」
の語がでてくる。その中で「盆」は「鉢」というとある。

・文化15年(1818)岩崎灌園いんせん著の「草木育種」に初めて「盆栽」
の語が登場し、鉢植の栽培方法について細かに記録されている。

・江戸時代には現在の「盆栽」の意味は確立されておらず、「鉢植」の
意味で用いられていた。

○近代の盆栽文化

・江戸時代の植木屋は本所(現、墨田区)・下谷(現、台東区)・染井(現、豊島区)などに集中したが、明治に入ると没落する者が現れ、江戸時代よりさらに繁栄を見せたのが、駒込村団子坂の植木屋である。

・明治・大正・昭和と「家庭園芸盆栽培養法」などの初心者向けの書物
なども登場し、庶民レベルまで盆栽を含めた園芸文化が浸透した。

・こうして広く世間に盆栽というものが普及したなか、大正12年の関
東大震災が起り、震災後の都市化の波におされ、郊外に新天地を求め
て大宮に移住した。盆栽村の誕生である。

・近代における「盆栽」の位置づけは、西洋にない、絵画彫刻と共に同
じ「美術」である。また「鉢植」とは異とするものである。

● 盆栽村

○ 盆栽村

盆栽村は、埼玉県さいたま市北区盆栽町に、盆栽業者が集団移住して形成された集落を指す呼称。また日本屈指の盆栽郷とされ、海外の盆栽愛好家にも知られる地区である。

○ 盆栽村の歴史

江戸時代から明治・大正時代まで、現在の東京都文京区千駄木にある団子坂には、多くの植木屋が集まって、菊人形づくりや盆栽業を営んでいた。しかし大正12年（1923）に起きた関東大震災をきっかけに、より広い土地を求め、盆栽業者だけの村を作る構想によって誕生したのが、大宮盆栽村である。

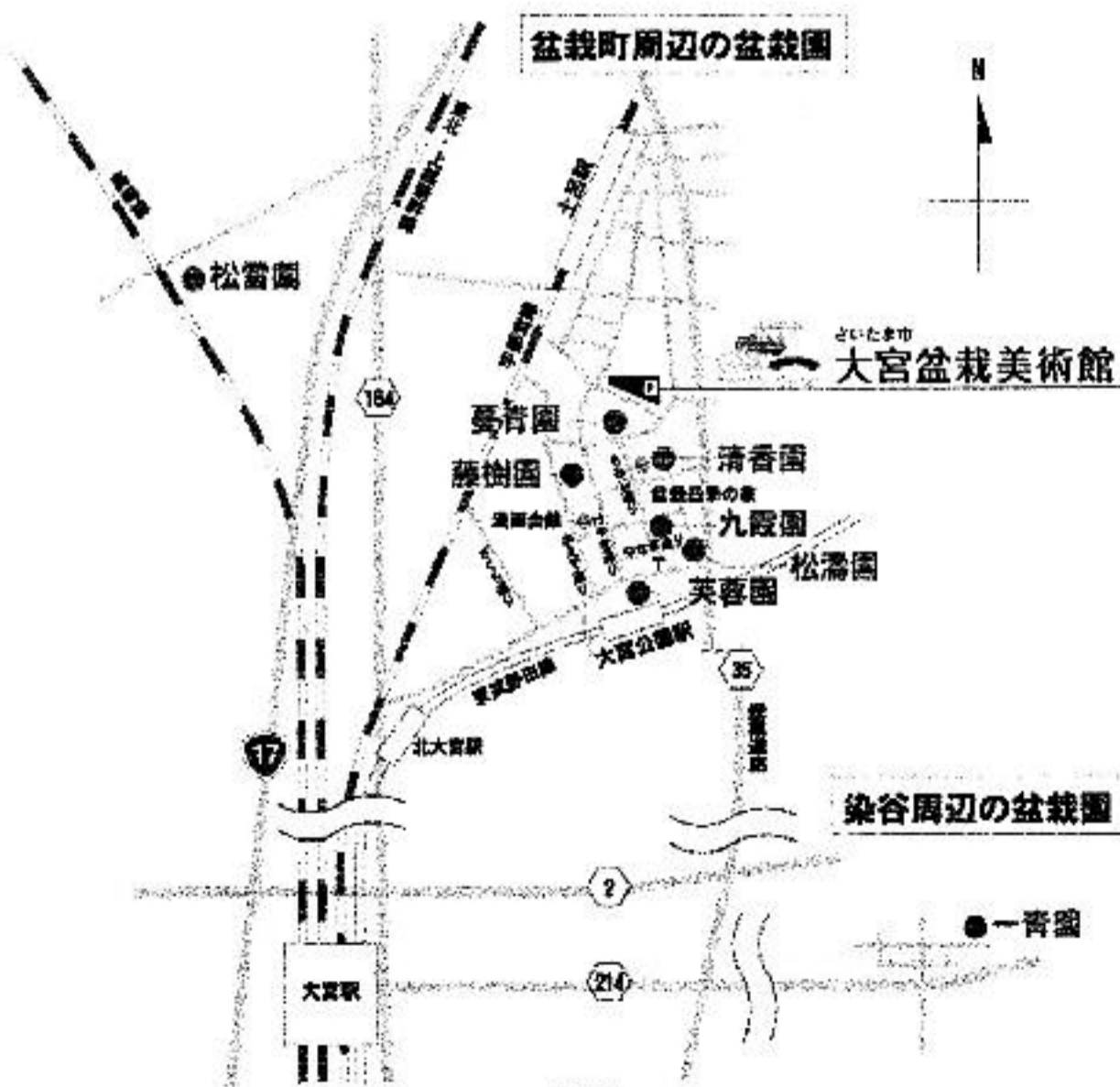
現在の道路巾は当時の開拓した時のままで、ほぼ碁盤の目状に造られ、それらは「盆栽四季の道」として、「けやき通り」「もみじ通り」「さくら通り」と呼ばれている。

また、戦前は30数軒の業者を数え、業者だけでなく村に住む人たちも多かれ少なかれ盆栽をもって（持つべしとの内規あり）親しまれてきた。現在は10軒の盆栽園がある。

昭和15年に旧大宮市に編入されてからは、世界にも例の少ない行政上の「盆栽町」という町名に生まれ変わった。

○ 主な盆栽園の紹介

- ・ 九霞園（きゅうかえん）
- ・ 松雪園（しょうせつえん）
- ・ 清香園（せいこうえん）
- ・ 松濤園（しょうとうえん）
- ・ 藤樹園（とうじゅえん）
- ・ 芙蓉園（ふようえん）
- ・ 蔓青園（まんせいえん）
- ・ 一青園（いつせいえん）



参考資料

・「田空」こころを刻む

埼玉県立歴史と民俗の博物館

・「美術コレクション名品選」

さいたま市大宮盆栽美術館

・ブリタニカ国際大百科事典

・広辞林

三省堂